バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第 157 号〔2018 年 3 月〕

さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8 章 22 節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

＋‥＋

主の聖名を賛美します。 バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第 157 号をお送りします。今月は北島伝道師をお招きして、ピリピ人（フィリピの信徒）への手紙 4 章 4-7 節よりメッセージをお取次ぎいただきました。

『思い煩うな』　　北島 伝道師

主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。あなた方の広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。 ピリピ（フィリピ） 4:4-6
だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日が思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。マタイ 6:34

使徒パウロはこの手紙を獄中で書きました。つまり、捕らわれの身という状況から、自由な状況にある人々へ「どんなことでも思い煩うな」と念を押しています。しかもこれは推奨ではなく、命令形になっています。聖書の「思い煩う」の語源は「心が分散する」からきていますが、その通り、思い悩むとき人は神のことも考えられなくなってしまいます。しかし、いくら思い煩っても問題は解決されず、思い悩むことにエネルギーを浪費するだけなのです。

ではなぜ私たちは思い煩うのでしょうか。それは自分の力で問題を解決しようとしているからです。自分の人生を自分で展開していると思うのが私たちですが、実際には自分の力で出生したわけでもなく、みな神によって生かされている存在です。つまり、私達の人生はすべての支配者である神の手にあるのです。思い悩む内容はたいてい今後のことですが、私達が何かできるのは今だけです。それなのに明日のことを思い煩うというのは、言ってみれば神に対する越権行為、神を忘れて自分で生き抜こうとする罪ある生き方なのです。

では、どうしたら思い煩いの問題を解決できるのでしょうか。それは、「すべての問題の最善の解決策をご存知である神様が、いつも私と共におられる」ということを忘れないことです。ピリピ 4 章 6 節に「主はすぐ近くにおられます。」と書かれてある通りですし、マタイ福音書の最後（28:20）で主が言われた通りです。この事を決して忘れなかったパウロは、ヘブル人にもこの事を念押ししています（ヘブル人への手紙 13:5）。今まで、いったいどれだけの人がこれらの言葉に支えられてきたっことでしょう。神は私達を決して見離さず、苦しくなった時こそ共にいてくださることを覚えるべきです。

神がこのようになさる理由は、神が私達について計画しておられることがあるからです。どうして今、こんな事態になるのか、神は私を見離されたのではないか、と思うようなことが発生しても、それは神のご計画のうちであり、私達はその中で生かされている。これを受け入れることが解決法なのです。

ですからあらゆる場所において、今与えられていることを感謝しなさい。失ったこと（物）を考えず、今与えられている命や家族、仕事、友人、信仰など、一切を喜びなさい。（I テサロニケ 5:16） 生きている事、救われていることを感謝して神を讃える祈りを捧げ、自分の願いを納得するまで祈りなさい。

主にすべてを委ね切り、神の国と神の義を第一とするとき、思い煩いの無い人生が与えられるのです。